

令和7年度  
資料第2号

令和7年度  
**北海道優良米生産出荷優良事例**  
～北海道優良米生産出荷共励会審査概要報告書～

令和8年3月

一般社団法人 北海道農産協会

## は じ め に

北海道優良米生産出荷共励会は、本年度63回を数え、この間関係の皆様には多大なるご支援、ご協力を賜りましたことを厚くお礼申し上げます。

令和7年は、融雪後の断続的な降雨の影響で春作業が遅れたことに加え、移植時の悪天候による植え傷みや生育停滞などで、初期生育に不安を抱いてのスタートでした。

しかしその後、天候は回復し、6・7月の月平均気温の平年差が、札幌管区気象台の統計開始以降高い方から第1位になるなど、高温傾向が収穫頃まで続いたため、生育は早まり粒重増加と整粒歩留も押し上げ、ほぼ平年に近い作柄となりました。

高温登熟が常態化する中、高温障害回避に向けた対応が生産現場に浸透し、白未熟粒や胴割米の被害を免れたことも特筆に値すると思います。

最終的に北海道農政事務所公表による北海道米の作柄は、全道の10a当たり平均収量は549kg（1.9mm選別）、作況単収指数98となりました。

一方、日本穀物検定協会の「米の食味ランキング」では、今年も「特A」評価を「ななつぼし」は16年、「ゆめぴりか」で15年連続して受け、「ふっくりんこ」は「A」評価となりました。一方で道内食率については、目標とする85%を14年連続で上回る90%と依然高い食率を維持しているものの、令和6年からは米の需給が引き締まり“令和の米騒動”が勃発、急激に上昇した米価格の変動も含め、今後の動向が気になるところです。ただ生産現場においては引き続き北海道米の評価向上に向け、さらなる生産技術の向上を図り、継続した良質・良食味米の安定生産に努めることが今後も重要です。

さて本年の共励会は、一昨年の品質・食味の低下の影響やコメ価格の高騰を受けて応募を躊躇する状況のなか、各地で熱心に推進いただいた結果、移植栽培・個人の部で1件、同生産グループの部1件、省力化移植栽培・個人の部で1件の計3件の参加出展を賜り感謝申し上げます。これらにつきましては、1月21日開催の審査委員会にて、厳正なる審査をもって各部門賞の選考を行っております。

本冊では第63回（令和7年度）北海道優良米生産出荷共励会の審査概要および受賞された方々の米作りのポイントや経営の特徴についてご報告するとともに、令和7年産以降の良質・良食味米安定生産の参考にご活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、本共励会の実施に当たり多大なご協力を頂いた関係各位に対しまして、改めて心からお礼申し上げます。

令和8年3月

一般社団法人 北海道農産協会

# 目 次

1. 第63回（令和7年度）北海道優良米生産出荷共励会実施要領	1
2. 第63回（令和7年度）北海道優良米生産出荷共励会審査基準	3
3. 第63回（令和7年度）北海道優良米生産出荷共励会審査委員会委員名簿	9
4. 第63回（令和7年度）北海道優良米生産出荷共励会審査報告	10
5. 第63回（令和7年度）北海道優良米生産出荷共励会受賞者名簿	13
6. 第63回（令和7年度）北海道優良米生産出荷共励会 現地事例報告	14
移植栽培部門 個人の部（うるち米）	14
移植栽培部門 生産グループの部（うるち米）	18
省力化移植栽培部門 個人の部（うるち米）	22

# 第63回（令和7年度）北海道優良米生産出荷共励会実施要領

## 1. 目的

高度な技術をもって良質・良食味米の生産出荷を達成するとともに、新たな技術や栽培方法の導入で水田経営の安定化を図るなど、他の範なる取り組みを行った生産者を表彰し、関係者に広く周知することで、北海道米の食味・品質向上を図り商品性を高めるとともに、稲作の経営の安定に資する目的で実施する。

## 2. 主催 一般社団法人 北海道農産協会

## 3. 後援 国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 北海道農業研究センター 北海道、地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 農業研究本部 北海道農業協同組合中央会、ホクレン農業協同組合連合会 北海道農産物集荷協同組合

## 4. 参加資格および手続き

(1) 道内で水稻を作付けする個人・生産グループ・法人（原則として北海道の優良品種を全面積作付けしていること）を対象とする。

但し、過去3カ年以内の最優秀賞受賞者は同じ栽培部門（「移植栽培部門」個人の部、同生産グループの部、「直播栽培部門」個人の部、同生産グループの部、「省力化移植栽培部門」個人の部、同生産グループの部）の参加資格を有しない。

(2) この共励会への参加は、市町村米麦改良協会もしくはJA等が農業改良普及センター所長（又は支所長）と協議の上推薦したものを、地区米麦改良協会において選考し推薦する。

① 「移植栽培部門」：個人の部

うるち米、もち米別とする。

作付面積（3カ年平均）はそれぞれ次のとおりとする。

○うるち米 2.0ha以上

○もち米 2.0ha以上

② 「移植栽培部門」：生産グループの部

栽培技術の取り組みが一致性を有し、圃場管理技術等においても、省力化や品質向上に向けて共同で効率化を図っている生産グループ・法人であること。

うるち米、もち米別とする。

作付面積（3カ年平均）はそれぞれ次のとおりとする。

○うるち米 20.0ha以上

○もち米 10.0ha以上

③ 「直播栽培部門」：個人の部

うるち米のみとする。

直播栽培の作付面積（3カ年平均）は1.0ha以上とする。

○うるち米 1.0ha以上

④ 「直播栽培部門」：生産グループの部

栽培技術の取り組みが一致性を有し、圃場管理技術等においても、省力化や品質向上に向けて共同で効率化を図っている生産グループ・法人であること。

うるち米のみとする。

直播栽培の作付面積（3カ年平均）は10.0ha以上とする。

○うるち米 10.0ha以上

⑤ 「省力化移植栽培部門」(高密度播種栽培（高密短、密播中苗）、成苗疎植栽培)：個人の部

うるち米のみとする。

省力化移植栽培の作付面積（3カ年平均）は1.0ha以上とする。

○うるち米 1.0ha以上

⑥ 「省力化移植栽培部門」(高密度播種栽培(高密短、密播中苗)、成苗疎植栽培)：生産グループの部

うるち米のみとする。

省力化移植栽培の作付面積(3ヵ年平均)は10.0ha以上とする。

○うるち米 10.0ha以上

(3) 地区米麦改良協会からの推薦調書による応募期限は、令和7年12月15日(月)とする。

推薦調書には、令和7年産の「栽培履歴」を必ず添付する。

(4) 大型施設を利用した生産者については施設の最終出荷実績を用いる。

## 5. 共励項目(移植栽培部門の例)

### 【個人の部・生産グループの部共通】

(1) 土づくり並びに施肥、栽培管理等

(2) 収量並びに収量の安定度

(3) 出荷成績(1等米・高品質米の出荷)

(4) クリーン農業等の取り組み(特別栽培米・Yes! clean米等の取り組み)

(5) 病虫害防除の取り組み

(6) 経営の観点からの評価(低コスト生産への取り組み等)

### 【個人の部】

(7) 良質米生産及び安定確収のための取り組み(品質向上及び確収に向けての技術的特徴等)

### 【生産グループの部】

(8) 生産グループとしての統一性、目標達成に向けた取り組み

## 6. 審査

審査は、別に定める審査基準により行うものとする。

## 7. 審査委員会

この共励会には審査委員会を設け、審査にあたる。

審査委員は一般社団法人北海道農産協会 会長が依頼し、審査委員長は審査委員会で互選する。

## 8. 表彰

審査の結果、その成績が優秀と認めたものを表彰する。

委員長が必要と認めた時は、他の機関および団体の表彰を受けることができる。

## 9. 調書の個人情報について

推薦調書に記載・提出された個人情報は、入賞通知・賞品などの送付の他、本共励会の運営、および一般社団法人北海道農産協会の事業運営のために、必要な範囲で使用する。また、このため業務委託会社等に情報を開示する場合がある。

入賞発表、優良事例報告書、会報、ホームページ等で優良事例として生産者の氏名他推薦調書の内容を広報する場合がある。

推薦調書の個人情報の取扱いは、当該生産者(集団にあっては集団の長)の承諾を得て取り進める。

個人情報については、一般社団法人北海道農産協会が定める「個人情報保護基本方針」に基づき取り扱う。

## 10. その他

本要領に定めるものの他、必要な事項は、一般社団法人北海道農産協会会長が別に定める。

## 第63回（令和7年度）北海道優良米生産出荷共励会審査基準 「移植栽培部門」

1. 北海道優良米生産出荷共励会における「移植栽培部門」の審査は、この基準に定めるところによる。
2. 審査は、推薦調書についての審査とし、成績の特に優秀なものについては、その成績をおさめた技術的要因について、状況に応じて現地調査を行うものとする。
3. 審査対象期間は、基盤整備中等で作付が不可能な場合を除き、直近の3年間とする。
4. それぞれの水稻作付面積（3ヵ年）の基準は次のとおりとする。
  - (1) 個人の部
    - 第1部うるち米 2.0ha以上
    - 第2部もち米 2.0ha以上
  - (2) 生産グループの部
    - 第1部うるち米 20.0ha以上
    - 第2部もち米 10.0ha以上
5. 審査は、次の審査項目毎に3ヵ年の成績を基準として採点する。但し、冷凍米飯などの業務用途米等の低タンパク米ニーズの無い品種や特殊な栽培の技術、収量、品質等の成績は除く。
  - (1) 土づくり並びに施肥、栽培管理等 51点
    - ア. 透排水性改善 (15点)

溝切り、心土破碎、融雪促進、稲わら処理等表面水排除のための営農努力について採点する。  
(但し、稲わら春鋤込みは減点対象とする。)
    - イ. 施肥量、施肥方法並びにケイ酸質資材等土壌改良資材の施用 (9点)

北海道施肥標準量（北海道施肥ガイド2020）を目安として採点する。
    - ウ. 堆厩肥、稲わら等の有機物施用 (9点)

10a当たり500kg以上の堆厩肥施用を基準に採点する。
    - エ. 移植時期、栽植密度 (12点)

育苗形式毎の栽培基準に基づいて採点する。
    - オ. 乾燥方法 (6点)

二段乾燥（もしくはそれに準じた乾燥方法）実施の有無により採点する。
  - (2) 収量並びに収量の安定度 20点

作付する上位3品種が地帯別作付指標に合致し、かつ95%以上の作付率であることを原則とする。

    - ア. 収量 (10点)

3ヵ年平均の10a当たり収量について、農政事務所の当該市町村の10a当たり平年収量を当該市町村の地帯別ふるい目幅別重量分布状況の数値で補正した値と比較して採点する。
    - イ. 収量の安定度 (10点)

10a当たり収量の3年間の変動係数に基づき採点する。
  - (3) 出荷成績 20点
    - うるち米
      - ア. 低タンパク米出荷率 (15点)

精米タンパク質含有率6.8%以下の出荷比率について採点する。  
該当品種はゆめぴりか、ふっくりんこ、おぼろづき、ななつぼし、ほしのゆめ、きたくりん

とする。

ただし、「ゆめぴりか」は7.4%以下、「おぼろづき」は7.9%以下の出荷比率とする。

イ. 1等米出荷率 (5点)

1等米の出荷率について採点する。

○もち米

1等米出荷率 (20点)

1等米の出荷率について採点する。

(4) クリーン農業等の取り組み 6点

特別栽培米・YES! clean米、有機JAS、環境保全型農業の取組面積に応じて採点する。

(5) 病害虫防除の取り組み 3点

発生対応型防除の励行などの確な病害虫防除の実施状況に応じて採点する。

(6) 経営の観点 10点

低コスト生産の実践度、品質とのバランスを考慮した省力化技術の導入などについて採点する。

(7) 個人の部については、良質米生産についての意識と目的達成のための努力や取り組みについて採点する。 10点

(8) 生産グループの部については、生産グループとしての取り組み（グループとしてのまとまり、目標達成に向けた取組み）状況について採点する。 10点

6. 順位の決定は、上記の各部門毎に各審査項目の合計点（両部門とも120点、小数点第2位以下を四捨五入）に基づき、審査委員会において決定する。

以上

## 第63回（令和7年度）北海道優良米生産出荷共励会審査基準 「直播栽培部門」

1. 北海道優良米生産出荷共励会における「直播栽培部門」の審査は、この基準に定めるところによる。
2. 審査は、推薦調書についての審査とし、成績の特に優秀なものについては、その成績をおさめた技術的要因について、状況に応じて現地調査を行うものとする。  
 なお、審査対象は「うるち米」のみとする。
3. 審査対象期間は、基盤整備中等で作付が不可能な場合を除き、直近の3年間とする。
4. それぞれの直播作付面積（3ヵ年平均）の基準は次のとおりとする。
  - (1) 個人の部（うるち米） 1.0ha以上
  - (2) 生産グループの部（うるち米） 10.0ha以上
5. 審査は、次の審査項目毎に3ヵ年の成績を基準として採点する。
 

(1) 基本技術	41点
ア. 融雪促進	(3点)
土作り（透排水性改善、稲わら処理、土壌改良資材・有機物施用）	(6点)
施肥	(6点)
施肥量（基肥・追肥）	
北海道施肥標準量（北海道施肥ガイド2020）を目安として採点する。	
イ. 湛水直播・乾田直播別技術	(各8点)
湛水直播：出芽促進技術	
（吸水・催芽・カルパーコーティング、落水期間）	(6点)
均平施工	(1点)
直播と移植のローテーション	(1点)
乾田直播：田畑輪換	(3点)
均平施工	(2点)
漏水対策	(2点)
種子予措	(1点)
ウ. 播種期、播種量	(6点)
播種期、播種量の目安に基づいて採点する。	
エ. 除草剤の適正使用	(6点)
薬剤の選択・処理時期・合計処理回数	
オ. 乾燥方法	(6点)
二段乾燥（もしくはそれに準じた乾燥方法）実施の有無により採点する。	
(2) 収量並びに収量の安定度	28点
ア. 収量	(16点)
3ヵ年平均の10a当たり収量について、農政事務所の当該市町村の10a当たり平年収量を当該市町村の地帯別ふるい目幅別重量分布状況の数値で補正した値と比較して採点する。	
イ. 収量の安定度	(12点)
10a当たり収量の3年間の変動係数に基づき採点する。	
(3) 出荷成績	8点
1等米出荷率（1等米の出荷率について採点する。）	

- (4) 病虫害防除の取り組み 3点  
発生対応型防除の励行などの確な病虫害防除の実施状況に応じて採点する。
- (5) 直播栽培に当たって創意工夫のある取り組みについて採点する。 10点  
(低タンパク米生産の取組み等も含む)
- (6) 直播栽培に係わる経営の観点からの評価について採点する。 10点
6. 順位の決定は、上記の各部門毎に各審査項目の合計点（両部門とも100点、小数点第2位以下を四捨五入）に基づき、審査委員会において決定する。
- 以上

## 第63回（令和7年度）北海道優良米生産出荷共励会審査基準 「省力化移植栽培部門」

1. 北海道優良米生産出荷共励会における「省力化移植栽培部門」の審査は、この基準に定めるところによる。なお、省力化移植栽培は高密度播種栽培（高密短、密播中苗）及び成苗疎植栽培とする。
2. 審査は、推薦調書についての審査とし、成績の特に優秀なものについては、その成績をおさめた技術的要因について、状況に応じて現地調査を行うものとする。

なお、審査対象は「うるち米」のみとする。

3. 審査対象期間は、基盤整備中等で作付が不可能な場合を除き、直近の3年間とする。
4. それぞれの省力化移植栽培の作付面積（3ヵ年平均）の基準は次のとおりとする。

- (1) 個人の部（うるち米） 1.0ha以上
- (2) 生産グループの部（うるち米） 10.0ha以上

5. 審査は、次の審査項目毎に3ヵ年の成績を基準として採点する。

- (1) 土づくり並びに施肥、栽培管理等 45点
  - ア. 透排水性改善 (12点)

溝切り、心土破碎、融雪促進、稲わら処理等表面水排除のための営農努力について採点する。  
(但し、稲わら春鋤込みは減点対象とする。)
  - イ. 施肥量、施肥方法並びにケイ酸質資材等土壌改良資材の施用 (6点)

北海道施肥標準量（北海道施肥ガイド2020）を目安として採点する。
  - ウ. 堆厩肥、稲わら等の有機物施用 (3点)

10a当たり500kg以上の堆厩肥施用を基準に採点する。
  - エ. 播種時期、播種量 (6点)

育苗形式毎の栽培基準・目安に基づいて採点する。
  - オ. 移植時期、栽植密度 (12点)

育苗形式毎の栽培基準に基づいて採点する。
  - カ. 乾燥方法 (6点)

二段乾燥（もしくはそれに準じた乾燥方法）実施の有無により採点する。
- (2) 収量並びに収量の安定度 17点
  - ア. 収量 (5点)

3ヵ年平均の10a当たり収量について、農政事務所の当該市町村の10a当たり平年収量を当該市町村の地帯別ふるい目幅別重量分布状況の数値で補正した値と比較して採点する。
  - イ. 収量の安定度 (12点)

10a当たり収量の3年間の変動係数に基づき採点する。
- (3) 出荷成績 15点
  - ア. 低タンパク米出荷率 (5点)

精米タンパク質含有率6.8%以下の出荷比率について採点する。  
該当品種はゆめぴりか、ふっくりんこ、おぼろづき、ななつぼし、ほしのゆめ、きたくりんとする。  
ただし、「ゆめぴりか」は7.4%以下、「おぼろづき」は7.9%以下の出荷比率とする。
  - イ. 1等米出荷率 (10点)

1等米の出荷率について採点する。

- (4) 病害虫防除の取り組み 3点  
発生対応型防除の励行などの確な病害虫防除の実施状況に応じて採点する。
- (5) 省力化移植栽培に当たって創意工夫のある取り組みについて採点する。 10点
- (6) 省力化移植栽培に係わる経営の観点からの評価について採点する。 10点
6. 順位の決定は、上記部門の各審査項目の合計点（100点、小数点第2位以下を四捨五入）に基づき、審査委員会において決定する。 以上

## 第63回（令和7年度）北海道優良米生産出荷共励会審査委員会

	所 属	役 職 名	氏 名
委員長	北海道 農政部 生産振興局	技術普及課 (上川農業試験場駐在) 上席普及指導員	小泉 滋治
委 員	国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構 北海道農業研究センター	寒地野菜水田作領域長	保田 浩
委 員	北海道 農政部 生産振興局	技術普及課 主査 (普及指導)	有田 匡志
委 員	地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 農業研究本部 中央農業試験場	水田農業部 部長	宗形 信也
委 員	北海道農産物集荷協同組合	業務部 課長	遠藤 章弘
委 員	北海道農業協同組合中央会	農政対策部 米穀農産課長	沖崎 慎
委 員	ホクレン農業協同組合連合会	米穀部 米穀総合課長	柴崎 智博

## 第63回（令和7年度）北海道優良米生産出荷共励会審査報告

一般社団法人北海道農産協会主催の第63回（令和7年度）北海道優良米生産出荷共励会の審査委員を代表して審査概要を次の通り報告します。

### 1. 令和7年の気象経過と水稻の作柄

令和7年の耕起作業は、4月中下旬の断続的な降雨の影響により、作業の遅れや土壌の乾燥が進まない状態で耕起されるほ場が目立ちました。育苗期間は、育苗中盤以降、気温が高く推移したため順調な生育となりましたが、やや徒長傾向の苗もありました。移植作業は、平年並に行われましたが、それまで高温で経過していたのが一変し、温度が低下した地域では、植え傷みや活着不良が散見されました。

6月2半旬以降、好天に推移したことで、分けつ始はほぼ平年並となり、分けつの発生が盛んになりました。その後も高温状態が継続したため、生育は早まり幼穂形成期は6月25日で平年より3日早く、出穂期は7月19日で平年より5日早くなり、開花・初期登熟も順調に進みました。7月に入ると、草丈が平年より長くなり、8月中旬以降の断続的な降雨により、各地でなぎきや倒伏が発生しましたが、引き続き高温で経過したため登熟が進み、成熟期は平年より9日早い8月31日になりました。

近年は暑い夏が常態化しており、令和7年も記録的な猛暑となったため、品質への影響が懸念されました。しかし、登熟期における適切な水管理など、高温障害防止対策が徹底されていました。また、出穂以降、日照時間が平年より多かったことと、登熟中盤以降の8月は白未熟粒が多発した令和5年ほどの高温ではありませんでした。さらに登熟後半は断続的な降雨もあり、土壌水分が収穫時まで維持されていたことから、高温による品質低下を防いだと考えられます。

一方、カメムシの発生が多く、各地で斑点米が発生しました。また、平年よりかなり早くなった成熟期に合わせて適期収穫ができなかったほ場や、降雨で収穫作業が遅れた地域では、刈り遅れと考えられる着色粒の発生が見られました。

気候変動による温暖化に対応するためには、これまで培ってきた低温対策に加え、高温障害や高温による病虫害発生対策も重要であることが再認識される年となりました。

### 2. 審査結果

本年は移植栽培部門・個人の部に1点、生産グループの部に1点、省力化移植栽培部門・個人の部に1点と合わせて3点の出展となりました。

審査は各地区米麦改良協会より提出して頂いた推薦調書に基づき、令和5～7年の3年間の出荷実績や栽培管理について検討、採点を行いました。それでは、最優秀賞受賞の3点について、優良米生産に向けた技術内容や、具体的な取組についてご紹介いたします。

#### 1) 移植栽培の部 最優秀賞受賞者

##### (1) 個人の部 うち米 佐藤 純司 氏 (JA新はこだて・木古内町)

佐藤さんは、経営面積5.9haの水稻+ハウレンソウの複合経営で、全面積「ふっくりんこ」を作付けしています。令和7年4月より「函館育ち南部米品質向上委員会」の副会長として、「ふっくりんこ」の認知度向上に向けてPR活動に力を注ぐなど、販売面においても活躍されています。

品質向上のための技術的特徴は、基本的に透排水性の良いほ場のため、稲わらは秋すき込みを前提とし実施していますが、滞水している箇所は無理に耕起せず、手作業で排水溝を施工し、融雪時も滞水か所の排水対策を施すなど、ほ場の乾田化に努めています。

また、適切な水管理が行えるように、畦畔の漏水か所を全筆補修しており、3年に1度は畦塗りを実施しています。そのため、移植後の浅水管理や前歴期間、冷害危険期の深水管理が容易にできるよ

うになっています。育苗では、移植時の草丈が10cm程度となるように、こまめな換気と適切なかん水により徒長防止に努めています。

低タンパク米生産のため、土壌診断結果に基づいた施肥を実施しているとともに、ケイ酸資材は40年以上継続して100kg/10a以上施用しています。

「毎日ほ場を観察する」ことにより、水稻の生育状況や水深、病虫害の発生状況をこまめに確認しており作付面積があまり大きくない分、ほ場毎の状況を把握でき常に状況に合った管理を実践しています。

経営の特徴は、コンバインや乾燥調製施設を7戸で共同利用し、機械修理も自身で行うなどコスト低減を図っています。また、本田防除においても共同の無人ヘリで実施していますが、JAや農業改良普及センターからの病虫害予察情報を元に、自身における毎日のほ場観察から防除日程を変更し適期防除となるようにしています。また、経営規模に対して過剰装備になるかもしれませんが、育苗箱並べ機を導入し労力の負担軽減を図るためのコストはかけるようにしています。

産米の出荷実績は、ブランド米として確立されている「函館育ちふっくりんこ」の栽培基準を遵守しており、令和5年からの3か年、全量タンパク質含有率6.8%以下の出荷となっています。また、上位仕分けの6.5%以下の出荷率は3か年平均で89.8%と非常に高い出荷率となっています。この実績は白未熟粒が全道で多発生した令和5年産の実績を含めた結果であり、特筆した成果であるといえます。

## (2) 生産グループの部 うるち米 とんぼの会 (JAたきかわ・滝川市)

とんぼの会は、26戸(令和7年度)の生産者からなる生産グループで、水稻作付面積は249.9ha(3か年平均)です。作付面積の57%は会共通の環境負荷軽減の栽培基準に基づいた栽培とし、「ゆめぴりか」「ななつぼし」中心の良食味米栽培を行っています。また、作付面積の9%は、高度クリーン米として化学合成農薬使用回数を5回以内とした特別栽培米を「ゆめぴりか」で実施しており、いずれの栽培も、環境に配慮した中で高品質米の安定栽培を図っています。

品質向上のための技術的特徴として、「とんぼの会」の生産地である滝川市江部乙町は、ほ場の多くが透排水性良好田であることから、可能な限り稲わらの秋すき込みを実施し、有機物の早期分解を促進し生育後半への土壌中窒素の発現量を抑えるとともに、温室効果ガスの発生量削減に努めています。一方、土壌水分が多く、秋すき込みが出来ないほ場は、溝切りによる停滞水排除を行い、乾田化に努めるなど、ほ場状態に応じた管理を実施しています。

近年の高温登熟に対応するため、出穂以降も気象状況に合わせて、用水の掛け流しや田面水の入れ替えを行い、白未熟粒や胴割粒の発生抑制に努めています。また、高温登熟により収穫前半でも収穫時の籾水分が15%近くまで低下する事例があったことから、水分状態を逐次確認し乾燥温度を調整し品質低下を防いでいます。

特色ある栽培の取り組みとして、高度クリーン米は特別栽培米の化学合成農薬成分使用回数基準よりさらに削減した5成分以内にするるとともに、全作型でネオニコチノイド系殺虫剤を使用しない栽培としており、「安全、安心、環境に優しい」産米を行っています。

「ゆめぴりか」の作付けにあたっては、後出来しにくい低タンパク米生産に向けたほ場を選択しています。また、目標収量を地帯別基準収量より低く抑えた窒素施肥量とし、低タンパク米生産に努めています。その結果、令和6、7年産米はともに「ゆめぴりか」の低タンパク米出荷比率は72%となり、良食味米生産への意識の高さがうかがえます。

生産グループで行っている特徴的な取り組みは、例年実施している青空教室(6月下旬開催)に加え、育苗期間、収穫前、冬期にJA、農業改良普及センターと連携した栽培講習会を実施し、栽培技術の研鑽を図っています。また、消費者、取引業者に対して、温湯種子消毒の現場視察や田植え・稲刈り体験など、生産現場や生産者とのつながりを意識した交流会を実施し、「とんぼの会」の米づく

りへの理解を深めるようにしています。さらに、地域の小学生に対しては、國學院大学北海道短期大学、滝川おもしろ食育塾（農業体験サポーター）と連携し、田植えから収穫・脱穀・食べるまでの体験や田んぼの生き物調査を行い、お米ができるプロセス、水田の生物多様性や役割について学んでもらう活動を実施しています

以上、グループとして良食味米生産や環境負荷を意識したこだわりの栽培、消費者や地域住民に向けた水稲栽培の魅力発信は、今後も食料を安定して供給する上で評価される活動と成果です。

## 2) 省力化移植栽培部門 最優秀賞受賞者

### (1) 個人の部 下田 秀樹 氏 (JA北ひびき・剣淵町)

下田さんは、経営面積25.1haのうち6.5haで水稲栽培と、小麦・大豆・加工用ばれいしょ等、畑作物の複合経営を実践されています。水稲の作付け品種は「ななつぼし」で、省力化栽培として密播中苗に取り組みられています。稲わらは全量ほ場外に搬出し、堆肥化して畑作物を中心に還元しています。透排水性改善対策は心土破碎を施工しており、乾田化促進を図っています。

省力化移植栽培に当たったの取り組みは、育苗ハウスの凹凸をなくすため、春先に鎮圧ローラを数回かけ苗質の揃った健苗を育成しています。また、均一な生育による初期生育の安定を図るため、3年に1度はレーザー均平機により、ほ場の均平作業を実施しています。密播中苗は慣行苗と比較すると苗質は劣る傾向にあるため、ほ場の均平は重要な事項といえます。

移植後は速やかに入水し植え傷みを抑えることを徹底し、その後も天候に応じた水管理を行い、初期生育向上のための管理を実践しています。中干しは幼穂形成期前と冷害危険期終了後の2回、土壌表面に軽くヒビ割れが入る程度まで実施しており、根活性の向上と倒伏対策を行っています。

以上の取り組みにより、収量は639kg/10a（3か年平均）となり、慣行栽培と同等の収量を確保しています。

省力化移植栽培に係わる経営的視点は、密播中苗により、育苗箱数、育苗ハウスが削減され、育苗に関する資材費や燃料費、水道光熱費が削減されています。また、労働時間が軽減されるため、他作物の管理作業に時間を確保できるようになり、経営全体におけるほ場管理の充実につながっています。

加えて北海道指導農業者として、長年にわたり培われてきた水稲栽培技術を次世代に継承するため、地域の若手農業者に対して積極的な技術指導を行っています。特に密播中苗の栽培技術については、ほ場でのフィールドワークを通じて実践的な指導を行い、若手農業者の技術力向上に寄与しており、地域農業の持続的発展と担い手育成に重要な役割を果たしています。

## 3. おわりに

今回、移植部門・個人の部および生産グループの部、省力化移植栽培・個人の部において、取り組まれた栽培技術、省力化技術の特徴、経営的な視点について紹介しました。

紹介した栽培技術は、いずれも安定確収と高品質米を生産する上で必要な基本的な技術であり、その効果も広く理解はされていますが、なかなか実践まで至っていない現況も見受けられます。受賞者の技術内容を確認するとともに、水稲生産者の皆さまの経営に対策技術を取り入れ、積み重ねてゆくことが、北海道米全体の品質向上と、その評価を高めるための推進力になると考えます。終わりに本共励会に参加頂いた関係者各位のご努力に心から敬意を表して審査報告といたします。

第63回（令和7年度）北海道優良米生産出荷共励会審査委員長  
北海道農政部生産振興局技術普及課（上川農業試験場駐在）  
上席普及指導員（農業革新支援専門員） 小 泉 滋 二

## 第63回（令和7年度）北海道優良米生産出荷共励会 受賞者名簿

※敬称略

### 1. 移植栽培部門

#### 【個人の部】

【うるち米 2ha以上】

表彰名	氏名	市町村名	所属農協名
最優秀賞	佐藤純司	木古内町	新函館

【もち米 2ha以上】

【出展なし】

#### 【生産グループの部】

【うるち米 20ha以上】

表彰名	氏名	市町村名	所属農協名
最優秀賞	とんぼの会	滝川市	たきかわ

【もち米 10ha以上】

【出展なし】

### 2. 直播栽培部門

【個人の部 うるち米 1ha以上】

【出展なし】

【生産グループの部 うるち米 10ha以上】

【出展なし】

### 3. 省力化移植栽培部門

【個人の部 うるち米 1ha以上】

表彰名	氏名	市町村名	所属農協名
最優秀賞	下田秀樹	剣淵町	北ひびき

【生産グループの部 うるち米 10ha以上】

【出展なし】

# 第63回（令和7年度）北海道優良米生産出荷共励会 現地事例報告

## 移植栽培部門 個人の部

### [うるち米] 最優秀賞

受賞者氏名 佐藤純司  
市町村名 木古内町

#### 1 経営状況 耕地面積 5.857ha (注) 田・畑などの合計面積

項目	年次	令和5年	令和6年	令和7年	3カ年の平均
水稻作付面積		5.6ha (5.6ha)	5.7ha (5.7ha)	5.5ha (5.5ha)	5.6ha (5.6ha)

注) 加工用米、新規需要米、政府備蓄米を除く作付面積。 ( ) 内はこれらを含む作付面積。

#### 2 家族の就業状況

本人・続柄	年	性別	令和5年	令和6年	令和7年
本人	55	男	○	○	○
妻	58	女	○	○	○
(備考)					

#### 3 立地条件と稲作の経緯

##### (1) 地勢・立地条件

木古内町は北海道南部、渡島半島の南部に位置し、津軽海峡に面した海と山の境界に広がっている。

農地は礫質を含んだ褐色低地土が多く、他にグライ低地土、灰色低地土が分布している。

佐藤氏が作付けているほ場のほとんどが、礫質を含む褐色低地土である。

##### (2) 稲作の経歴

木古内町の農業は水稻と施設園芸の複合経営が中心である。水稻作付面積は342haで、21戸が作付けている。

佐藤氏の経営は水稻と施設園芸（ほうれんそう）である。平成21年に経営主となり、水稻栽培においては基本技術の励行により、10a当たり収量は常に町内トップクラスである。施設園芸は平成25年から導入し、単位当たり収量は地区平均以上を確保している。



## 4 稲作技術の特徴

### (1) ほ場の乾田化と土づくり

収穫後、秋起こしを実施しているが、滞水している箇所は無理に耕起せずに、排水溝を手作業で施工している。また、春の融雪水が滞水した箇所も排水溝を施工し、ほ場の乾田化に努めている。

佐藤氏のほ場は、礫質が含まれるほ場が大半を占めているが、稲わらの秋すき込みで地力増進を図っている。

### (2) 作付品種

佐藤氏が作付けしている品種は、「ふっくりんこ」の1品種である。「函館育ちふっくりんこ」はブランドとして確立しており、栽培マニュアルで定められた基準を遵守して栽培を行っている。

項目		年次	令和5年	令和6年	令和7年
作付面積	品種名	ふっくりんこ	5.6ha	5.7ha	5.5ha
	合計		5.6ha	5.7ha	5.5ha

### (3) 育苗管理と移植

健苗育成と適期移植を特に重視している。育苗中は育苗ハウス内や育苗箱内に温湿度計を設置し、こまめに換気を行っている。また、根張りの状態を意識し定期的に確認しながら育苗管理を行うなど、健苗の育成に努め、苗の草丈が10cm程度になるよう適切な水管理を実施している。移植の開始は町内の中でも早く、健苗が適期に移植されている。

項目		年次	令和5年	令和6年	令和7年
育苗形式名			中苗マット	中苗マット	中苗マット
移植時期			5月20日～5月24日	5月18日～5月22日	5月18日～5月22日
栽植密度	畦幅 × 株間		33cm × 11cm	33cm × 11cm	33cm × 11cm
	m <sup>2</sup> 当たり株数		27.5株/m <sup>2</sup>	27.5株/m <sup>2</sup>	27.5株/m <sup>2</sup>

### (4) 施肥

低タンパク米生産を特に意識しており、土壌診断は定期的に行っている。施肥量は診断結果と前年産までのタンパク質含有率を基に決定しており、窒素施肥量は10a当たり5.6kgである。

また、ケイ酸補給のためケイ酸質資材は40年以上継続して施用している。施用量は10a当たり100kg以上である。

項目		年次			令和5年			令和6年			令和7年		
		N	P	K	N	P	K	N	P	K			
施肥 (kg/10a)	全層	5.6	6.8	5.6	5.6	6.8	5.6	5.6	6.8	5.6	5.6	6.8	5.6

項目		年次	令和5年	令和6年	令和7年
土壌改良資材 kg/10a	資材名		粒状ケイカル	粒状ケイカル	粒状ケイカル
	施肥量		100kg	100kg	100kg

#### (5) 水管理

毎年、適切な水管理を行うためには場全筆の漏水箇所を確認し、漏水箇所の補修を行い、3年に一度は畦塗りをを行っている。

移植後の水管理は浅水で管理し、初期生育の向上に向けた水管理を実施している。幼穂形成期はほ場毎に確認し、前歴期間は10cm、冷害危険期は18～20cmで管理するなど、生育に合わせた深水管理を行っている。なお、中干しは、幼穂形成期前と冷害危険期終了後に行っている。

近年の高温対策として登熟期間はかんがい水の掛け流しを行い、胴割粒や白未熟粒の発生を防いでいる。

#### (6) 病虫害防除

育苗では苗立枯病対策として、育苗土は自分で配合して土壌診断を数回実施し、pH調整を確実にしている。また、出芽時の土壌水分の状態には特に注意し、過湿にならないよう管理を徹底している。

育苗ハウス周辺及び畦畔の除草は重点的に行い、特に畦畔や農道の除草は除草機を使用し4～5回行い、病虫害が発生しづらい環境づくりに心がけている。

本田防除は木古内町無人ヘリコプター防除協議会が行っており、佐藤氏もオペレーターの免許を取得し、地域の防除を行っている。佐藤氏は主要病虫害の初発を見逃さないために、毎日、全ほ場巡回し状況を確認し、JAや普及センターからの生育に関する情報や病虫害予察情報を基に、協議会に適切な防除日について提案するなど、地域全体が適期に防除できるよう努めている。

#### (7) 収穫・乾燥調製

収穫作業及び乾燥調製作業は共同作業である。収穫作業は玄米による適期刈取判定を行い、収穫順番を決定して適期収穫を実施している。乾燥調製は遠赤外線乾燥機を使用し一時乾燥を行い、広域籾乾燥調製施設に出荷後、仕上げ乾燥し良質米の調製を行っている。

### 5 産米の生産状況

佐藤氏の低タンパク米出荷率は100%（低タンパク出荷率R5：100%、R6：100%、R7：100%）で、そのうち上位仕分けのタンパク6.5%以下の出荷率は、過去3カ年の平均で89.8%（R5：70%、R6：94.8%、R7：100%）と高い出荷率となっている。なお、木古内町における過去3カ年のタンパク6.5%以下の出荷率は平均28.7%である。

項目		年次	令和5年	令和6年	令和7年	3ヵ年の合計
総出荷数量 ①			312.4俵	364.4俵	448.9俵	1,125.7俵
一等米数量 ②			312.4俵	364.4俵	448.9俵	1,125.7俵
一等米比率 ②/①			100.0%	100.0%	100.0%	100.0%
内 高 品 質 米	精米タンパク質含有率6.8%以下仕分対象品種出荷数量		312.4俵	364.4俵	448.9俵	1,125.7俵
	精米タンパク質含有率6.8%以下		312.4俵	364.4俵	448.9俵	1,125.7俵
	精米タンパク質含有率6.8%以下出荷率		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

## 6 特徴的な取組について

(1) 労働力は家族労働のみのため、令和7年に育苗箱並べ機を導入し、育苗箱を並べる際の省力化を図っている。

佐藤氏のは場の多くは自宅から離れている。このことから、令和3年に水位センサーを設置し、水管理（水位確認）の省力化を進めている。

育苗培土は自身で配合し、土壌診断を複数回実施しており、病害対策はもとより低コスト化に努めている。また、乾燥調製施設（一次乾燥）やコンバインを7戸で共同利用しコスト低減を図っている。

(2) 低タンパク米生産に対する意欲は強く、特に施肥量については重視しており、稲わらの秋すき込みに対応した施肥量を検討し、窒素が過剰にならないように比較的少ない窒素施肥で低タンパク米を生産している。

(3) 「函館育ちふっくりんこ蔵部」や「函館育ち南部米品質向上委員会」の役員として、「ふっくりんこ」の認知度向上にむけた道南エリアの量販店での販売促進等に力を注いでいる。また、木古内町水稻研究会の会長であり、地域の稲作振興はもとより、若手農業者の育成に対して尽力している。

（執筆者：渡島農業改良普及センター 専門主任 伊藤 貴人）

# 第63回（令和7年度）北海道優良米生産出荷共励会 現地事例報告

## 移植栽培部門 生産グループの部

[うるち米] 最 優 秀 賞

受賞団体名 とんぼの会  
市町村名 滝川市

### 1 経営状況 耕地面積 692.5ha (注) 田・畑などの合計面積

項目	年次	令和5年	令和6年	令和7年	3カ年の平均
水稲作付面積		221.9ha (250.7ha)	214.8ha (242.7ha)	228.8ha (256.2ha)	221.8ha (249.9ha)

注) 加工用米、新規需要米、政府備蓄米を除く作付面積。( )内はこれらを含む作付面積。

### 2 構成生産者の状況

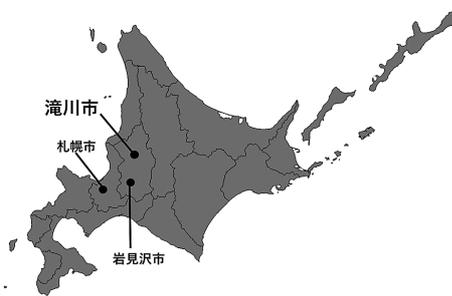
	令和5年	令和6年	令和7年
戸数	27	27	26

### 3 立地条件と稲作の経緯

#### (1) 地勢・立地条件

滝川市は北海道中央部、石狩川と空知川の合流する平野部に位置しており、平坦で広い土地と豊富な水源が、農業地帯形成に寄与してきた。

とんぼの会の主産地である江部乙町地域は、滝川市の北半分を占める。河川敷近くの砂壤土（細粒質褐色低地土）は、水はけの良い土壤であり、夏の昼夜の温度差が大きい内陸性気候も相まって、水稲栽培に適した生産地帯である。



#### (2) 稲作の経歴

滝川市の水稲作付面積は2,190ha、水稲作付農家戸数は183戸であり、稲作を基幹作物として、畑作物、園芸作物との複合経営が主である。

とんぼの会は、昭和63年頃、滝川市が道内で米を安定供給できる地域として生活クラブ北海道（生協）に認知され、旧江部乙町農協青年部が米を供給することとなった。当時は「ゆきひかり」を生産していた。

次第に需要が高まり、より多くの消費者に米を供給するために、青年部だけでなく有志の江部乙町農業者を招集して構成されたのが、現在のとんぼの会の設立経緯である。

とんぼの会を設立して数年後、より安心・安全な米を生産しようと、当時は先駆けであった高度クリーン米栽培（以下高度CL米）を試験導入し、その栽培技術を定着させてきた。併せて、組合員が無理なく継続して生産できる基準、かつ消費者のニーズに応える基準での稲作栽培として、減農薬栽培（以下とんぼ米 詳細下記）に取り組んでいる。

## 4 稲作技術の特徴

### (1) 作付品種

品種は需要の多い「ななつぼし」を主力に生産・販売を行い、併せて高付加価値のある米生産として高度CL米「ゆめぴりか」の生産に取り組んでいる。

項目		年次	令和5年	令和6年	令和7年
作付面積	品種名	とんぼ米ななつぼし	71.9ha	77.0ha	77.1ha
		とんぼ米ゆめぴりか	25.7ha	30.8ha	37.7ha
		とんぼ米ゆきひかり	8.6ha	8.8ha	7.9ha
		とんぼ米きたくりん	10.8ha	0ha	0ha
		高度CLゆめぴりか	18.7ha	21.3ha	22.2ha
		一般米・その他	86.2a	76.9ha	83.9ha
		合計	221.9ha	214.8ha	228.8ha

### (2) 土作り、透排水性改善

積雪が1mを超える道内有数の豪雪地帯であることから、3月上・中旬に、融雪促進のためケイ酸カリ等を施用し、ほ場の早期乾燥、初期生育の向上に努めている。

収穫後には心土破碎を実施し、排水性の向上と乾土化を図っている。また、作業可能なほ場では秋耕起を実施し、有機物早期分解に努めている。

土壌水分が多く、秋耕起ができないほ場では、溝切りによる停滞水の排出に努めている。

項目		年次	令和5年	令和6年	令和7年
稲わらの処理法	前年産	春鋤込	40%	40%	40%
	当年産	搬出	0%	0%	0%
		秋鋤込	60%	60%	60%
土壌改良材 kg/10a	資材名		スーパーミネカル粒	スーパーミネカル粒	スーパーミネカル粒
	施用量		80kg	80kg	80kg
透排水性改善			サブソイラ	サブソイラ	サブソイラ

### (3) 雑草管理

成分カウント遵守のため、とんぼ米の除草剤体系は初中期一発剤1回（3成分）を基本としている。早めの除草剤処理が必須技術だが、当地域は田植え時期に風速10mを超える日もある強風地域であり、植え傷みと相まって、薬害による生育遅延も心配される。少しでも活着を早めるため、健苗の移植をするよう努めている。

高度CL米の除草剤体系は“初中期一発剤（2成分）→雑草発生時バサグラン”としていたが、ノビエの取りこぼしが目立っていた。令和7年度より、“初期剤+初中期一発剤”の体系処理に変更し、初発のノビエを抑制することに努めた。

#### (4) 水管理

前例のない高温傾向に対する危機感が高まっており、以下の取り組みを実施している。

- ① 天候に合わせて用水の掛け流し、水の入替えを行い、白未熟粒や胴割粒の発生抑制に努めている。
- ② 高温傾向により幼穂形成期以降も生育が旺盛である。茎数過多、倒伏、タンパク値上昇の抑制のため、幼穂形成期後の深水管理の徹底による穂揃い性の向上に努めることを組織内で共有している。
- ③ 有機質肥料を用いるとワキの発生が多くなる傾向であるため、中干しの実施に努め、根の活力向上を図っている。

#### (5) ケイ酸資材施用

融雪材および追肥でケイ酸資材を施用し、ケイ酸含有率を高めて良食味米生産に取り組んでいる。

#### (6) 病虫害防除

種子消毒は、JAの温湯消毒施設を利用し、農薬費のコスト低減、作業の省力化となっている。

カメムシ防除に関しては、講習会等で出穂期予測と防除適期について情報を習得し、成分カウント遵守のため、出穂期後7～10日の1回防除を基本としている。

労働力の減少によって1戸あたりの耕作面積は年々増加傾向である。水稻栽培面積を維持する手段の一つとして、ドローンによるケイ酸追肥作業の省力化が定着している。ドローンは共同利用もしており、導入コスト・維持コストの削減となっている。

#### (7) 収穫・調製

乾燥調製について、構成員の多くが遠赤外線乾燥機を導入している。また、タイマー機能を活用しながら一時乾燥を実施し、胴割粒等の品質低下を防いでいる。

近年は秋の高温多照傾向により、収穫前半であっても籾水分が15%に近いことが多い。籾の状態を見ながら低温、もしくは送風のみでの乾燥とし、品質を損なわないよう努めている。

### 5 産米の生産状況

会員全体で上記の取り組みと基本技術の励行に努めている。JA出荷の際に調製作業がなされ、全量1等米出荷としている。

項目	年次	令和5年	令和6年	令和7年	3カ年の合計
総出荷数量①		21,367俵	20,674俵	22,032俵	64,073俵
一等米数量②		21,367俵	20,674俵	22,032俵	64,073俵
一等米比率②/①		100%	100%	100%	100%
内高品質米	精米タンパク質含有率6.8%以下仕分対象品種出荷数量	19,499俵	19,836俵	21,271俵	60,606俵
	精米タンパク質含有率6.8%以下	3,510俵	6,943俵	7,019俵	17,472俵
	精米タンパク質含有率6.8%以下出荷率	18%	35%	33%	29%

(参考) とんぼの会農業者 高度CL米「ゆめぴりか」・とんぼ米「ななつぼし」  
収量・蛋白質含有率データ (空知農業改良普及センター中空知支所調べ)

	高度CL米「ゆめぴりか」		とんぼ米「ななつぼし」	
	精玄米重 (kg/10a)	蛋白質含有率 (%)	精玄米重 (kg/10a)	蛋白質含有率 (%)
R 7	550	6.1	698	6.4
R 6	576	6.2	データなし	

## 6 特徴的な取組について

### (1) とんぼ米・高度クリーン米の生産基準

とんぼ米の施肥基準は、化成肥料による窒素量を10kg/10a以内、高度CL米では5kg/10a以内(土壌区分・土壌肥沃度に応じた施肥対応で多少前後)としている。

とんぼ米では農薬成分カウント8成分以下、高度CL米は5成分以下としている。また、温湯消毒した種子を使うこと、ネオニコチノイド系統剤は使用しないこととしており、「安心、安全、環境に優しい」お米を生産するよう努めている。

高度CL米「ゆめぴりか」作付ほ場を選択する際は、後出来しにくい低タンパク米生産に向けたほ場を選択している。また、いもち病対策の農薬が使用できない基準であるため、窒素施用量を抑えて過繁茂を避けるようにしている。

### (2) 会員同士の技術研鑽

例年行っていた6月下旬に加えて、令和7年度からは育苗期間、収穫前、冬期にJA・普及センターと連携しながら青空講習会を行っている。

とんぼの会独自の講習会として、新規農薬の試験展示ほを設置し、夏に現地巡回、冬には結果報告会を行っている。また、発生量の多い雑草・病害虫の情報交換、農薬注文リストを適宜更新するなど、減農薬条件での米の安定生産を図っている。

### (3) 消費者・子どもたちに向けた、水田地帯の魅力発信

消費者、取引業者に対して、実開催型の交流事業を積極的に実施し、温湯消毒(化学農薬に頼らない種子消毒)の現場視察、田植え・稲刈り体験、および交流会を設けるなど、生産現場や生産者との繋がりを意識しており、産地に対する理解を育み、産米の消費拡大に努めている。

地域の小学生5年生に対して、國學院短大生、滝川おもしろ食育塾(農業体験サポーター)と連携し、田植えから収穫・脱穀・食べるまでの体験、および田んぼの生き物調査を実施している。これらの活動を通して、お米ができるプロセス、水田の生物多様性、自然環境における水田の役割について学ぶ機会を提供し、次世代に向けた“食育活動”を担っている。

子どもたちからは「思っている以上にたくさんの虫が暮らしていることが驚きだった」「自分たちで収穫したお米はいつもより美味しい」との声が聞かれている。



田んぼの生き物調査



生息数が減少するイチョウウキゴケ



稲刈り体験

(執筆者: 空知農業改良普及センター中空知支所 専門普及指導員 水尾 健斗)

# 第63回（令和7年度）北海道優良米生産出荷共励会 現地事例報告

## 省力化移植栽培部門 個人の部

### [うるち米] 最 優 秀 賞

受賞者氏名 下 田 秀 樹  
市 町 村 名 剣淵町

#### 1 経営状況 耕地面積 25.1ha （注）田・畑などの合計面積

項目	年次	令和5年	令和6年	令和7年	3カ年の平均
水稲作付面積		6.5ha (6.5ha)	6.5ha (6.5ha)	6.5ha (6.5ha)	6.5ha (6.5ha)

注) 加工用米、新規需要米、政府備蓄米を除く作付面積。 ( ) 内はこれらを含む作付面積。

#### 2 家族の就業状況

本人・続柄	年	性別	令和5年	令和6年	令和7年
本人	65	男	○	○	○
妻	69	女	○	○	○
(備考)					

#### 3 立地条件と稲作の経緯

##### (1) 地勢・立地条件

剣淵町は上川北部に位置し、名寄盆地に属する。天塩川の支流である剣淵川が町内を南北に流れ、その流域は農業に適した平地となっている。東西は丘陵地帯となっている。

気候は内陸性気候で、夏期は比較的高温多照に恵まれるが、晩夏から秋季にかけては曇りの日が多く、雨は春季に少なく秋季に多い傾向である。

剣淵町は入植当初、極度の泥炭地層が広がっていたが、客土等の土壌改良の結果、現在は農業に適した生産基盤が整備されている。

##### (2) 稲作の経歴

剣淵町の農業・農村を取り巻く環境は、高齢化や農家戸数の減少が進む一方で、一戸当たりの栽培面積が拡大している。このため、農作業の省力化や軽労働化に対応できる新たな技術の導入が求められてきた。剣淵町では、大豆や小麦を中心に、水稲や園芸作物を組み合わせた複合経営が多く見られる。

下田氏の経営は、水稲を基幹とし、大豆、小麦、加工ばれいしょ、金時の採種、園芸作物を組み合わせた複合経営である。こうした地域の状況を踏まえ、下田氏は、令和3年より慣行中苗から水稲省力化技術の密播中苗の栽培を導入した。

## 4 稲作技術の特徴

### (1) 種子予措と育苗管理

育苗には、JAが実施した温湯消毒済みの種子を使用している。種子予措作業は清潔な環境下で行い、D型ハウス内において水温を10～12℃に保ちながら、約7日間浸種した。その後、食物成長調整剤の処理し、蒸気式出芽器を用いてハト胸状態まで催芽を揃えて、は種を行っている。

また、は種時には、追肥作業の省略と健苗育成および初期生育向上を目的として、エコロングを施用している。

苗の老化を防止するため、育苗日数は30日とし、適期に移植を開始している。

さらに、健苗を安定的に育成するため、育苗講習会には必ず出席し、JAおよび普及センターからの指導内容を遵守励行している。

### (2) 均一で丈夫な苗づくりのためのハウス整地

育苗ハウスの整地時は春先に鎮圧ローラを数回かけ、育苗ハウス内の凹凸を徹底的になくしている。これにより、トレー毎の水分が均一になり、苗質の揃った健苗を育成している。

さらに育苗期間中は、苗の徒長を防ぐために、5日おきに合計4回程度、ローラー等で意図的に苗へ接触刺激を与えている。この管理により、根張りが良く、活着性や初期生育に優れた硬い苗を育成している。

項目	年次	令和5年	令和6年	令和7年
育苗形式名		密播中苗	密播中苗	密播中苗
播種時期		4月20日～4月20日	4月20日～4月20日	4月20日～4月20日
播種量（催芽粃）		400ml／箱	400ml／箱	400ml／箱
移植時期		5月20日～5月22日	5月20日～5月22日	5月20日～5月22日
栽植密度	畦幅 × 株間	33cm × 11cm	33cm × 11cm	33cm × 11cm
	m <sup>2</sup> 当たり株数	27.5株／m <sup>2</sup>	27.5株／m <sup>2</sup>	27.5株／m <sup>2</sup>

### (3) 稲わらの搬出

水稲収穫の収穫作業は自脱用コンバインで行い、稲わらは細断せず、長わらのままほ場へ搬出している。

刈高はやや高めに設定し、その後の集草や結束作業を行いやすくなるよう配慮している。収穫後の稲わらは、120cm角のロールベラーで結束し、速やかに搬出している。

搬出した稲わらは、小麦収穫後に約1年間十分に熟成させた稲わら堆肥を施用し、その後作として大豆および金時などの豆類を栽培している。特に金時については、採種用として生産しており、初期生育の安定性や健全な根張りにより、生育ムラの少ない健全な株づくりが可能となっている。

なお、稲わらをほ場外へ搬出することでケイ酸の持ち出しが生じることから、水稲本田には、ケイ酸質資材を毎年100kg／10a施用し、ケイ酸の補給に努めている。

### (4) 透・排水性の改善の実施

透水性および排水性の改善を目的として、稲わら搬出直後に、溝切りによる表面水の排

除を全ほ場で実施している。これにより、降雨後の滞水を防ぎ、ほ場の早期乾燥を図っている。

さらに、翌春にはほ場が十分に乾燥した条件下で、1連のサブソイラを用いた心土破碎を行っている。施工は、作業幅3m間隔、作業深40cmとし、土壌への負担を抑えるため、できるだけ低速で丁寧に実施している。

サブソイラ施工の頻度は、土壌条件に応じて区分しており、粘質土ほ場では毎年、泥炭土ほ場では隔年で実施している。

また、暗きょ排水は約10年前に整備しており、排水機能を維持するため、暗きょパイプ内の清掃を毎年欠かさず行っている。

項目		年次	令和5年	令和6年	令和7年
堆厩肥施用量 kg/10a			0 kg	0 kg	0 kg
稲わらの処理法	前年産	春鋤込	0 %	0 %	0 %
	当年産	搬出	100%	100%	100%
		秋鋤込	0 %	0 %	0 %
土壌改良材 kg/10a	資材名		ケイカル	ケイカル	ケイカル
	施用量		100kg	100kg	100kg
透排水性改善			心土破碎	心土破碎	心土破碎
(備考) 心土破碎 (粘土：毎年、泥炭：隔年)					

#### (5) 初期の水管理の徹底

移植後は、苗の植え傷みを最小限に抑えるため、速やかに入水することを徹底している。

その後の初期水管理については、気温や天候の変化に応じて水深を細かく調整し、苗の早期活着と健全な初期生育の確保に努めている。

また、水管理の精度を高めるため、毎朝必ずほ場を見回り、状態を確認しながら適切な管理を行っている。

#### (6) 根の発達を促すための計画的な中干し

稲の根張りを向上させ、倒伏しにくい健全な株を育成するため、出穂前に中干しを1～2回実施している。中干しの程度は、土壌表面に軽くひび割れが入る程度とし、過度な乾燥にならないよう留意している。実施時期は、幼穂形成期前で、冷害危険期が終了した後とし、稲の生育状況や天候を見極めながら適期を判断している。中干しによって根域に酸素を供給し、健全な根の形成を促すことで、安定した生育と耐倒伏性の向上につなげている。

### 5 産米の生産状況

北海道米の主力品種である「ななつばし」に特化して生産を行っている。

3年平均の単収は638kg/10aで、1等米率は90%以上を確保している。

なお、出荷については全量を系統出荷としている。

さらに令和7年より、コメの乾燥調製における品質向上と安定化を目的として、従来の熱風乾燥機に代え、遠赤外線乾燥機を導入した。

## 6 特徴的な取組について

### (1) 育苗箱使用箱数および育苗期間の縮減によるコスト低減・労力軽減

令和3年から省力化を目的として、育苗形式を従来の中苗マットから密播中苗へと変更した。

導入にあたっては、2年間にわたりハウス1棟分を用いて密播中苗の試作を行い、は種量の違いが育苗管理や苗質に及ぼす影響について検証した。

その結果、育苗資材費（育苗箱・培土・フィルム等）や燃料費、水道光熱費の削減が可能となった。また、は種作業・かん水・温度管理等に要する労働時間が大幅に軽減され、作業が集中する時の労力削減にもつながった。これらの効果により、育苗段階における生産コストが着実に低下し、労働投入量の削減による低コスト化が図られた。

### (2) 省力化移植栽培の導入による経営変化

省力化移植栽培を導入した結果、一般栽培と比較しても収量・品質に大きな差は見られず、販売収入は従来通り確保された。一方で、育苗段階における作業時間やコストが削減され、労力軽減と所得向上が実現した。この省力化により、水稻育苗管理に要していた時間に余裕が生まれ、大豆・小麦・加工用ばれいしょ・金時の採種ほにおける、ほ場づくりや植付作業、追肥などの管理作業に十分な時間を確保できるようになった。その結果、個々の作物管理が丁寧に行えるようになり、経営全体におけるほ場管理の充実につながっている。

### (3) 均平なほ場づくり

イネの水没を防ぎ、安定した生育環境を確保するため、ほ場の均平作業を計画的に実施している。ほ場の均平性は、水管理のしやすさや除草剤の効果に直結することから、レーザー均平機を個人で所有し、3年に1度は必ず均平作業を行っている。

この取り組みにより、ほ場内の水深が均一となり、雑草の発生を抑制するとともに、水管理や除草作業の省力化が計られている。さらに、移植後の初期生育が安定し、収量・品質の安定化にもつながっている。

### (4) 次世代の担い手育成に向けた技術伝承の取組

北海道指導農業士として、長年にわたり培われてきた高度な水稻栽培技術を次世代に継承するため、地域の若手農業者に対して積極的な指導を行っている。とりわけ、密播中苗の栽培技術については、ほ場でのフィールドワークを通じて実践的かつ丁寧な指導を行い、講師として技術の伝達に努めることで、若手の技術力向上に大きく寄与している。

さらに、日頃から地域全体の技術水準の向上を念頭に置き、栽培管理に関する相談対応や助言も積極的に行っており、その取組は地域農業者から高い信頼を得ている。こうした活動は、単なる営農指導にとどまらず、地域農業の持続的発展と担い手育成に資する重要な役割を果たしている。

(執筆者：上川農業改良普及センター士別支所 専門主任 佐竹 浩二)